

2021 年度 武蔵野市地域自立支援協議会 障害当事者部会 活動報告

《親会 担当委員》部会長：福本 千晴、担当委員：安東博、長谷川 圭
《障害当事者部会員》部会長：吉村 友哉、副部会長：立山 尚、天畠 大輔

■月例会議 年12回開催

2021 年／4 月 19 日(月)、5 月 17 日(月)、6 月 21 日(月)、7 月 19 日(月)、8 月 16 日(月)、
9 月 13 日(月)、10 月 18 日(月)、11 月 15 日(月)、12 月 20 日(月)
2022 年／1 月 17 日(月)、2 月 21 日(月)、※3 月 14 日(月)開催予定

■武蔵野市地域自立支援協議会テーマ

「当事者と共に、当事者の声を市民に届け、誰もが暮らしやすい武蔵野市を目指す」

■活動報告《障害当事者部会、今期のミッション》

1：当事者の視点から武蔵野市の地域課題を提示する

- ・当事者部会の開催と他部会への参画。障害種に関係なく参加できる当事者部会の開催を行った。
- ・これまで同様に市内の障害当事者の参加を募り、声を集める。
- ・月例会の周知を今年度は「つながり」だけでなく、「心のつながり」への掲載をした。1 名の新規ご参加があった。
- ・市報は範囲が広すぎて、当事者の方や関係者に届くか分からないのではと、「つながり」と「心のつながり」のみの掲載になったが、今後は配布数が多い市報や、SNS 等の活用もできるといいと思う。
- ・月例会はイベントホールで集まって開いてきたが、コロナが広がってから zoom とのハイブリッドで開くようになった。Zoom で参加しやすくなった面と、参加のしにくさや会話のしにくさが増えていると感じる。その方への働きかけの必要性を感じている。

2：他の専門部会の活動に部会の代表者が参画する

- ・専門部会以外では「あったかまつり」実行委員会へ参画した。
- ・実行委員会には Zoom で参加できるが、周りの雰囲気が分かりにくいことがあった。
- ・コロナ禍でオンライン開催へ変更となり、当事者部会で長年続けてきた「模擬選挙※」が出来なかったが、広く知ってもらえるように、模擬選挙の説明をオンライン配信できるよう、現在取り組んでいるところ。

*模擬選挙とは

2016 年から選挙管理委員会の方に来ていただき、実際に使用するものを使って実施。当日の候補者・立会演説会・出口調査・事前相談を含め、あったかまつり実行委員会や他部会、そして武蔵野市選挙管理委員会の協力がある。回数を重ねるにつれて、合理的配慮についても改善してきている。

3：「心のバリアフリー」ハンドブックの改訂（他にて作業）に協力する。

- ・年度の初めに確認した所、改訂の予算が決定していないので、改訂作業は動き始めている。
- ・現況「差別解消法」は公だけでなく、民間企業や就労にも適用されていることを告知したい。
- ・バリアフリー基本構想 2022 からのアプローチや、他自治体の類似するものを集めて、情報を共有したい。

■その他、当事者の声

《障害者福祉センターの在り方について》

- ・現在の建物は機能面での使いにくさを感じる。交通面で行きにくい場所にある。
- ・福祉避難所として・訓練の場として・集まる場として・体験施設として・在宅に戻る前のクッションとして考えたり、高校生のサポートなどもできたりするといいいのではないかな。
- ・身体障害者の方の自立生活体験の場の少なさ。知的障害の方の自立生活への体験の機会は、もっと少ないのではないかな。このような体験ができる場所が市内に必要。

《65才問題》

- ・65歳を超えても障害者サービスを使いたい。使っている事例が実際にある。武蔵野市の対応もケースバイケースのようである。障害種別による対応の違い、市区町村レベルの地域格差もあると聞く。生活の質を落とさないようにしていきたい。

《雇用施策との連携による重度障害者等就労支援特別事業（重度障害者の就労助成金制度）》

- ・部会員より解説、当事者部会で共有した。都内ではまだ実施目途が立っていない。就労中にも様々な介助（重度訪問介護と同等の）を受けられるようになる。
- ・助成金への潜在的なニーズを明らかにするための、わかりやすい説明とアンケート調査や意見集約などができるといいのではないかな。

《子どもに関すること》

- ・現在、親会で話し合う機会がないので、意見を出していく必要がある。

《選挙》

- ・点字版の選挙公報が来たのが遅かったが、点字での投票は前と比べスムーズであった。
- ・コロナで郵便投票が可能となっており、その登録がスムーズであった。
- ・インターネット投票の可能性は考えられないかな。

《コロナ禍、ワクチン、医療など、困りごと》

- ・接種に関する情報へのタイムリーなアクセスや、予約手続きにおけるバリアを感じる。
- ・健康・安全・生命にかかわる、個々の障害に応じた必要な課題への配慮が届かない点は、防災においても質的に同じ面がある。
- ・診察時、盲ろう者などで手話通訳などを使う場合、通訳者が変わると伝わる内容が変わるということがある。特に精神科診療などでは、間に入った人によって診断まで変わってしまうケースがある。

《住まいのこと》

- ・武蔵野市と連携している実績がある不動産屋がある。とくに生活保護制度に理解がある。自立生活を送る際、福祉サービスの支給量を決定する際の根拠はどこに置かれているのか。身体的機能面のみ、または障害等級のみで支給内容を判断されると、実際の必要量との間に差が生じることがある。個別の調査によるカスタマイズを願いたいところである。

以上